

『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』

聖書 マタイによる福音書 24 章 3 節 ~ 13 節 賛美歌 529 530

説教 森田幸男牧師

今日の説教の題は 13 節の、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」から取りました。この新共同訳聖書の見出しでは、“終末の徴”となっております。

今日の 3 節を見ますと、「イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがやって来て、ひそかに言った。『おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終るときには、どんな徴があるのですか。』と弟子たちが尋ねたとあります。この弟子たちのイエス様への質問は、すぐ前の 24 章 1 節 2 節が前提になっています。ここは前回読んだところですが、もう一度読みます。「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指さした。そこで、イエスは言われた。『これらすべての物を見ないのか。はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』」ここはイエス様がエルサレムの神殿で教えておられて、夕方になれば出て行かれる。そしてベタニア村で泊まれ、また翌日、神殿に来て教えられるということを最後の週は繰り返しておられたのです。

けれども「イエスが神殿の境内を出て行かれる」というのは、ただそのような行きかえりだけではなくて、これはイエス様がエルサレムの神殿と訣別されたことでもあるのです。つまり、この神殿には神はおられない。そういう決然たる思いでイエス様は神殿の境内を出ていかれたのであります。しかし弟子たちが近寄って来て、イエス様に神殿の建物を指さした。そして彼らが何と言ったかということはここには省略されていますが、マルコによる福音書の方を見るとこうなっています。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」と驚嘆しているのです。今彼らが見ているエルサレムの神殿というのは、ソロモンがバビロン捕囚の前に建てたものから三度目のものです。今彼らが見ているのはバビロン捕囚から帰って来て、紀元前六世紀に再建されました。それをイエス様当時のヘロデ大王が倍の広さに拡張工事をしたのです。それが紀元前 20 年に始めて、彼の時代には出来上がらなくて、紀

元 64 年に工事が終わったということですから、この時はまだ拡張工事の途中ですが、主なものは出来ていたのでしょう。弟子たちは神殿を指さして、「なんとすばらしい建物でしょう」と言います。そこでイエス様は言われました。「これらすべてのものを見ないのか。はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と。あなたたちが驚嘆しているこの建物は、既に崩れているのだ。その内部は崩れてしまっている。しかし弟子たちは外観のすばらしさに驚いているのです。しかしその建物も崩れると主イエスは言われたのです。そして拡張工事が終わって僅か数年後の紀元 64 年に、神殿は崩壊したのです。84 年もかけて拡張したものが僅か 6 年で崩されてしまったというのが、歴史の事実であります。

このマタイによる福音書が書かれたのは紀元 70 年代のことです。エルサレムの神殿が崩壊してそんなに日が経っていない時ですから、この福音書を書いた人は神殿の崩壊の事実は知っているのです。そういう歴史の事実が何十年もさかのぼってイエス様の時代に反映させられているということはあるわけです。それは今日の箇所ならどういふところに、後の時代のことがイエス様の在世当時に組み入れられているかと言えば、例えば、弟子たちの質問が 3 節にあります。「このエルサレムの神殿が崩壊する、その事はいつ起こるのですか」というのは、当然弟子たちはイエス様に聞いたでしょう。これはいいわけですね。しかしその後です。「あなたが来られて世の終るときには、どんな徴があるのですか」と、このように質問しているのです。これは主イエス様がメシアとして再臨されるときのことを聞いているわけです。しかしこの時点では、弟子たちはイエス様が 23 章ですっと語ってこられたことを聞いていたのですが、彼らは何も分かっていなかったのだということが、今見ました 24 章の 1-2 節ではっきりしています。イエス様は決然として神殿を後にして出て行かれるのですが、弟子たちは神殿を見て驚嘆しているという、この落差は天と地の開きがあります。その弟子たちが、「あなたが来られて世の終るときには、どんな徴があるのですか」というような質問を弟子たちがイエス様にするはずはありません。そんな信仰を彼らは持っていませんでした。イエス様は亡くなられるけれども、また再臨の主として来られるのだという信仰を弟子たちが持ったのはもっと後のことです。或いは、マタイによる福音書が書かれた当時のことなのです。それがここに持ち込まれているわけですね。

アメリカでは、聖書の福音書のどれがイエス様の本当に語られた言葉か。イエス様が語られた言葉とされているけれども、どの部分は編集者なり、マタイが書き加えたものなのかということ専門家が研究し、色分けして記した聖書が出来ているのです。

それはそういう研究もあっていいと思いますが、私たちはそういうことはできませんし、今ここにある聖書を通して神様の御言葉を聞くのであります。

そういうわけですから、イエス様在世当時のこと、それから福音書が書かれた当時の状態、そして今日の個所も、23章も同じですけれども、実は旧約聖書というものが下敷きになっているわけです。例えば3節の、「イエスがオリーブ山に座っておられる」という情景の描写です。オリーブ山というのは、エルサレムの神殿の丘の東側にケデロンの谷があって、その東側にオリーブ山があって、イエス様が最後のお祈りされたゲッセマネの園というのはオリーブ山の西の裾野にあるのです。オリーブ山はエルサレムよりも数十メートル高いのです。ですからオリーブ山から谷越えにエルサレムを見渡すことが出来るのです。

この「イエス様がオリーブ山に座っておられる」という箇所については、旧約聖書の終りから二つ目の、ゼカリア書の14章4節以下にこういうことが書かれています。「その日、主はエルサレムの東にあるオリーブ山の上に立たれる。その日、エルサレムから命の水が湧き出で、半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい、夏も冬も流れ続ける。主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主は唯一の主となられ、その御名は唯一の御名となる。その日には、万軍の主の神殿にもはや商人はいなくなる。」ということが実は書かれているのです。

イエス様が神殿から商人を追い払われたということはこの福音書の21章12節以下にありました。「あなたがたは祈りの家(神殿)を強盗の巣にしている」と憤られたのです。これはとても大事な出来事です。そういうことを踏まえて実は今日の箇所があるのです。ですからイエス様は今まさにオリーブ山に、唯一の主として座しておられる。こういう旧約聖書の背景があって今日の話が進むわけです。

そして、「いつ神殿が崩れるというようなことが起こるのですか。あなたが再臨されるときにはどんな徴があるのですか」と弟子たちが聞いたのに対して、イエス様はお答えになりました。4節に「人に惑わされないように気をつけなさい」とあります。この「気をつける」というのは「しっかり見る」という言葉です。つまり弟子たちは外観に目も心も奪われているのですが、“物事の真実、真相をしっかりと見なさい”とっておられるのです。5節以下にこうあります。「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』(再臨の主)と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、

方々に飢饉や地震が起こる。」これらの現象は現代の世界の状態と重なるような感じがいたします。けれどもイエス様は、「これはまだ世の終りではない」と言われます。そして8節を見ますと、「しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりである」と。産みの痛みそのものというのは、大変なものです。今言われたような飢饉があり、地震があり、戦争があり、民と民が争うということがある。確かにそれは痛みであり、そんなことはないようにと私達は願うわけですが、「これはまだ産みの苦しみの始まりなのだ。本当の痛みというのはこれからなのだ」と言っておられるのです。

聖書の表現というのは意味が重なっています。時代も、旧約時代があり、イエス様在世の時代があり、マタイによる福音書が書かれた時代があり、そして今、私たちはこの聖書を読んでいます。時代も三重にも四重にも重なって、私たちはこの聖書を読んでいるのですから、本当に複雑なんですね。例えば3節、「あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか」とこのように問うています。これはもう一つ別の訳をつけますと、「あなたの御臨在と、世の完成の徴は何ですか」ということです。

「終り」というのは「完成」という意味もあります。「主なるあなたの御臨在と、世の完成の徴は何ですか」と訳したら、大分ニュアンスが変わりますね。そして14節には、「そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから終わりが来る。」このようにあります。「それから終わりが来る」というこれも、「その時、目標(目的)に達しているのだ」という意味もあります。そうすると<世の終わり>というイメージをもってもいいわけですが、それと同時に、「本当に神様が望まれる世界の完成、神様の御心が目標に達する、そういうことの徴というのは何ですか」という意味合いも重なってあるわけです。神様の御心、御計画の達成という事は、外観だけ見ていると分からないのです。

イエス様はエルサレムの神殿を高いオリブ山からしっかりと見ておられる。物事というのはそういう大所高所から見ないと、本当のところが見えないということがあります。6節~7節に記されたようなことはその当時にもあったのでしょうか。そして今20世紀にも起こっているこのようなこと、これはまだ産みの苦しみの始まりなのです。本当の痛みというのは、その後に来るのだということでもあります。そして本来の産みの痛み、そしてここにも重なった意味があると思うのですが、人が産みの痛みに耐えられるのは、新しい生命が誕生するからですね。或いは、新しい世界がそこで生み出されていくからです。新しい物が生まれるときには、何時も産みの痛みがあるのです。ではその産みの痛みの本番は何かということですが、9節に「あなたがた

は苦しみを受け、殺される。また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる」とあります。これが、産みの苦しみの本番なのです。それが、キリストの本当の臨在と、世の完成、或いは 14 節に「御国」とありますが「神の国の開始の徴」ということなのです。9 節のこういうことが神の国、神のご支配の徴になるというのはどういうことか。「神の国」というのは、神様が、イエス様が支配なさる国ということです。人間すべてを支配されるのですから、支配される者はその方に従うという主従関係が起きる。それが「神の国」です。

ですから 9 節、「その時、あなたがたは苦しみを受け、殺される。(イエス様がそうであったように。)また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。」何故そのようなことになるかということ、イエス様に従うからです。それが 14 節の「御国の福音があらゆる民へ証しされる」ということなのです。つまり、神様、イエス様に従う人間がいて、その人間は、神の名のゆえに、キリストの名のゆえに、憎まれ、苦しみを受け、殺される。けれども、それを耐え忍ぶ人間が現れてくる。これは「教会の誕生」「クリスチャンの誕生」と言ってもよいと思います。そのようにして、この世の何ものをも恐れず、そういうものから自由にされた新しい人間が、つまり神に、キリストに本当に従う人間が誕生する事実こそ、「神の国の到来」「終末の徴」なのです。「福音」というのは「勝利の知らせ」です。苦しみを受け、殺されて、あらゆる民に憎まれるというようなことですが、それに耐える人間が生まれて来る。このことこそ終末の徴なのです。それが御国の福音、すべてのことに勝利する本当の自由として全世界に宣べ伝えられる。正にそこでこそ神様の御心が目標に到達しているのです。

イエス様の伝道の第一声は、マタイによる福音書 4 章 17 節にある、「悔い改めよ。天の国は近づいた」ということです。「悔い改める」というのは、「理解が改まる」ことでした。「神の国は近づいた」とイエス様がおっしゃったので、「どこに？」と、聞いた人は皆思ったかもしれません。「神の国」というのは、「神の支配」「神の支配行動」のことです。それが「近づいた」とイエス様は言われるのです。それは死に至るまで従順であるイエス様その方において、神の支配と支配行動が私たちに近づいたということ。また、そのイエス様が人の心に宿り、主の名の故に憎まれ、苦しみを受け、殺される。しかし御国の福音にあずかっているゆえに、永遠の命としての神の霊がその人の内に宿っていますから、いかなる苦しみも、この自由を奪うことはできない。

ルカによる福音書 17 章 20 節 21 節にこういうやり取りがあります。今日の箇所と内容的に重なります。「ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イ

イエスは答えて言われた。『神の国は見える形では来ない。＜ここにある＞＜あそこにある＞と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。』」前の口語訳では、「神の国は、実に、あなたがたのただ中にあるのだ」となっていました。この「ただ中」の方がいい訳でしょうか。神の御支配というのは、先ずあなたがたのただ中にある。そして今日の 12 節では「多くの人の愛が冷える」とありましたが、「あなたがたの間に」愛がよみがえるのです。ですから、神の国は、「各自のただ中」にもあるし、「あなた方の間」にもあるということです。そういう新しい人間が生まれて、つまり、神に従い、イエス様に従う人間が現れるということが、終末の神の国の徴なのです。そして神の国の福音がすべての人に証しされるのだ。それが、神様が願っておられる神の国の目標なのだ。こういうことが今日の箇所の主旨であります。

次回読みますマタイによる福音書 24 章 35 節に、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」というイエス様のお言葉があります。地震で崩れることがあるでしょう。やがて何万年、何億年という未来には、この地球そのものが影も形も無くなるということもあるでしょう。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」本当にイエス様その方と、イエス様が真実こめて語られるその言葉、そこで言われていること、これは崩れない。そのイエス様その方の霊、神の霊が宿った人間が新しい人間なのです。そういう人間が誕生し、最後まで耐え忍ぶ。いろいろな形で見えるようになる。それが「神の国の徴」「神の御心が目標(終末)に達した徴」なのです。

そういう意味で、私たち信仰を与えられた者は、先ず神様に従う者たちです。その人間が、「神の民」なのです。そのような人間が神様の福音を身をもって証しする。そのようにして神様のご計画が目標、終末に達するのです。今日の箇所の見出しの「終末の徴」というのはそういうことであります。

お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。

どうか、私たちが世の様々な現象、また、様々な起こる問題の中に、あなたの変わることのない御支配と導きをしっかりと見ることのできる者としてください。そして、あなたの御心に従う者としてください。そしてあなたの御心が天に成る如く、地にも成るために働く者たちとしてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン